

---

# 高村樁誘拐事件

ともゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高村椿誘拐事件

### 【Nコード】

N8609B

### 【作者名】

ともゆき

### 【あらすじ】

強盗と鉢合わせした椿が誘拐された！ そんな中大神が気づいた手がかかりとは？ そして大神は彼女を救出できるのか？

(前編)

太正12年10月のある日の9時を回ったころ。大帝國劇場・帝劇の事務局。

「じゃ、かすみさん、由里さん。行つてきまーす」

普段は売店の売り子をしていて、売店の仕事がない時は藤井かすみや榊原由里の事務局の手伝いをしている高村椿が顔を出した。

「じゃあ、気をつけて」

そう、椿はかすみと由里に頼まれて買い物に出かけるところだった。

「……ところで、他に何か買ってきて欲しいもの、ありますか？」

「……特にないわね」

「わかりました、それじゃ」

「気をつけてね」

そして椿が帝劇を出て行った。

そして帝都銀行銀座支店の前を通りがかつたときだった。

何者かが帝都銀行から脱兎のごとく飛び出してきて、椿とぶつかった。つてしまった。

「きゃっ！」

椿が叫び声をあげて転んだ。

相手のほうも派手に転んだようだ。

「……大丈夫ですか？」

椿が男に近づこうとしたそのときだった。

「あ……」

そう、その人物の持っていた鞆の中から札束のようなものが見えたのだった。

そして、よく見るとその人物は黒眼鏡サングラスをしていて、口を手ぬぐいで覆っていた。

「あ……」

椿はその人物の正体が何者か気づいたようだ。

その人物は鞆を拾うといきなり椿の腕を掴んだ。

「……い、痛っ！」

「……来い！」

そして男は椿の腕を引つ張ると何処かへと走り去って行ってしまった。

\*

「……あれ？ 椿ちゃん、まだ帰ってきてないのかい？」

大神一郎が事務局の二人に聞いた。

「あれ？ 大神さん、どうしたんですか？」

由里が大神に聞く。

「いや、椿ちゃんに頼みたいことがあったんだけど……。まだ帰ってきてないのかい？」

「ええ。もう11時だって言うのに……」

「……本当にどこ行ったのかしら？」

「……まだ帰ってきていないの？」

そう言いながら藤枝あやめが事務局に入ってきた。

「あ、あやめさん」

「確かに変ね。私には『10時前には帰ってくる』って言って出て行ったのに……。ところで、その椿が行ったお店ってわかるかしら？」

「ええ。その店に『9時半頃に行くから店を開けておいてくれ』ってお願いしていますから」

「……とにかく、椿がその店に行っているかどうか確かめてみましょう」

「……はい、はい。そうですね。ありがとうございます」

そう言うとかすみは電話を切った。

「……どうだった？」

「……それが、椿が店に来ていない、って言うんです」

「なんですって?」

「ええ。なかなか来ないから電話をして確かめようかと思った矢先に電話が来た、と言うんで…」

「…じゃあ、椿はどこへ行ったのかしら?」

「とにかく探しに行つて来ます!」

「頼むわ」

そしてかすみと由里が事務局を出て行つた。

\*

「…それにしても、椿、どこ行つたのかしら?」

「そうよね。あの子、道草なんか食うような子じゃないのに…」

「それに買い物と言つてもそんなに荷物も多くないはずだし…」

由里とかすみがそんな会話をしながら道を歩いていると帝都銀行の近くでなにやら人だかりがしていた。

「…なにかしら?」

「行つてみましょう!」

「…済みません、一体どうしたんですか?」

かすみが近くにいた野次馬に聞いた。

と、その野次馬もかすみの顔を見て、

「あ、あんた帝劇の事務局の…」

「…ええ、そうですね、一体何があつたんですか?」

「あ、なんでも今朝、開店してすぐに帝都銀行に強盗が入つたらしいんだよ」

「強盗が、ですか?」

すると別の野次馬が、

「それでさ、目撃者の話だと、逃げようとした際に女の子とぶつかつて、そいつがその子連れて、逃げて行つたらしいんだ。それがさ

…」

「…どうかしたんですか?」

「その目撃者の話だと、その子が売店の椿ちゃんによく似ていた、

って言うんだ」

「…なんですって?」

それを聞いた由里が思わず素っ頓狂な声を上げた。

\*

「…椿が?」

かすみたちから話を聞いたあやめは思わず声を上げてしまった。

「本当に椿ちゃんが誘拐されたのか?」

大神も驚いて聞き返した。

「まだ断定は出来ないんですが、証言を聞いてみるとなにやら鞆を持った男に椿が連れ去られた、って…。いま、目撃者が警察で話をしているらしいんですが…」

そのとき、不意に帝劇事務局の蒸気電話が呼び出し音を立てた。

「…私が出るわ」

そう言うとおやめが電話を取る。

「…大帝国劇場です。…はい、はい。…ええ、仰るとおりです。はい。わかりました。また連絡をください」

そう言うとおやめは電話を切った。

「…誰からだったんですか?」

大神が聞く。

「…警察からだったわ。どうやら強盗に誘拐されたのは椿だったよ  
うね」

「本当ですか?」

「ええ。目撃者の証言から、どうやら誘拐されたのは椿じゃないか、  
って警察も思ったらしくて、電話をかけてきたのよ」

「となると…」

「…とにかく警察に連絡しましょう」

\*

話は少し前にさかのぼる。

「入れ！」

男が乱暴に椿をある部屋の中に押し込んだ。

椿は部屋に入った勢いで転んでしまった。

男は鞆の中を「ごそごそ」と漁ると、縄を取り出した。

「騒がれると悪いんでな。悪く思うなよ！」

そして男は椿の手を後ろ手に縛り上げると、持っていた手ぬぐいで猿轡をする。

椿は一体何がなんだかよくわからなかった。

(…まさか、この人は…)

男とぶつかった時に、鞆の中からのぞいた札束、そして自分が置かれている状況…。

(ま、まさかあたし…)

そう、椿が考えていることはひとつだけだった。

(…この人は泥棒で、あたし誘拐されて人質に取られちゃったんだ…。このままじゃあたし、口封じで殺されちゃうよ…)

何とか逃げ出したいが、ここではそれも無理であろう。

すると、男が椿の顔をじっと見た。

「…？ お姉ちゃん、もしかして…、帝劇の椿ちゃんか？」

(…え？ この人あたしの事知っているの？)

「やっぱりそうだろ、帝劇の椿ちゃんだ。何回か芝居見に行ったことがあるんだよ」

「…う、うぐ」

猿轡をされたままの姿で椿が頷く。

すると、男は椿の猿轡を外した。

「悪かったな、椿ちゃん。面倒なことに巻き込んだりして。でも、こうしなきゃいけないかったんだ」

「…こうしなきゃ、って…。だからって強盗までしていい、って…とにならないでしょう？」

「それはわかってるさ！ でも、こっちだってどうしても金が必要だったんだ」

「…」

「…いいか、椿ちゃん。言うことさえ聞いてくれれば何もしいかならな」

「…一体あたしをどうする気なの？」

「…ここまで来たんだ…。こうなったら帝劇の米田支配人にでも身代金を要求するさ」

\*

「椿が誘拐されたらしい」と言う話をあやめから聞いた大帝国劇場支配人・米田一基は警察に連絡を入れ、にわか帝劇内部は慌しくなった。

「…それにしても椿が誘拐されるなんて…」

大神から話を聞き、やはり同じ屋根の下で働いている、という事で不安になったのだろう、マリア・タチバナが心配そうに言う。

「でも、椿ちゃんが誘拐されたのはたまたまだったのからね」

「たまたま、って…」

「おそらく犯人にとっても椿ちゃんと出くわしたのは予想外の出来事だったんだよ。それで犯人は目撃証言をされたら叶わないと思っただんだよ。そして犯人は咄嗟に椿ちゃんを連れて行ってしまった…。ここから先はあくまでも想像だけど、今頃犯人は椿ちゃんをどう扱っているか困っているはずだよ」

「…でも隊長。犯人は椿を殺す事だってありえるでしょう？」

「さあ、そうれはどうか？」

「どうか、って…」

「銀行強盗をしたところで奪った額は高が知れている。おそらく犯人は椿ちゃんを使って米田支配人に身代金を要求するつもりだよ。…勿論、オレだって犯人の言いなりになる気はないし、必ず椿ちゃんを助け出すつもりだよ」

「…当てにしますよ、隊長」

「わかってる、って」

そして時計の針が12時近くになるうとしていたときだった。不意に事務局の蒸気電話の呼び鈴が鳴った。

「オレが出る」

そう言つと大神は受話器を取った。

「もしもし」

「大帝国劇場か？」

「そうだけど」

「そちらに大神と言つ男はいるか？」

「大神は自分ですが」

「そうか。それじゃ話は早いな」

それを聞いた大神はその場にあつた鉛筆と紙を手元に引き寄せると「椿ちゃんの誘拐犯」と書いて回りに見せる。

「それで、自分に何の用ですか？」

「一度しか言わないからよく聞けよ。帝劇の椿ちゃんを預かっているんだ。返して欲しかったらだな……」

そのときだった。

なにやら大砲が弾を撃つたときのような音が当たりに鳴り響いた。それから1、2秒立ってだろつが、電話の向こうからも同じ音が鳴り響いた。

思わず当たりを見回す大神。

電話の向こうの相手も一瞬呆然としたようだったが、すぐに、

「……お、おい、聞いているのか！」

電話の向こうの声が怒つたように言つ。

「あ、ああ」

「とにかく椿ちゃんを預かっているんだ。返して欲しかったら5万円を用意しろ」

「……5万円だと？」

「用意できなかつたら、椿ちゃんがどうなつても知らないからな」

「ちょっと待て。5万円なんて金、すぐには用意できないぞ」

「とにかく用意するんだ！」

「だからすぐには用意できない、って言っているだろ？ とにかく、1日だけ待ってくれないか？」

「…1日だと？」

「明日までには何とか用意する。だから頼む。1日だけ待ってくれないか？」

「…本当に明日までに用意できるんだろうな？」

「オレは海軍の軍人だ。言ったことは必ず守る！」

一瞬の後、

「わ、わかった。明日の今頃、もう一度電話する」

「…本当だな」

「本当だ。大丈夫だ。それまで椿ちゃんには何もしない」

そして電話は切れた。

「…どうしたんですか、隊長？」

マリアが大神に聞いた。

「…さつき鳴った大砲の音、あれはドンだったよな…」

マリアは事務局にかかっている時計を見る。

「え？ ええ。丁度お昼を回ってますから」

この当時はまだ時報代わりに宮城（今の皇居）から12時になると空砲を打ち上げる「午砲」と呼ばれる習慣が残っていたのだった。

そして大神は暫く何か考え事をしていたようだった。

「…どうしたんですか、隊長？」

「…マリア、宮城周辺の地図を持ってきてくれ」

「宮城周辺の…？ わかりました」

「それから、紅蘭を呼んできてくれ」

（後編に続く）

(前編) (後書き)

(作者より)この作品に対する感想等は「ともゆきのホームページ」  
のBBSの方をお願いします。

(後編)

「大神はん、ウチに何の用や?」

「そう言いながら紅蘭がなにやら丸めた紙を持って事務局に入ってきた。」

「…椿ちゃんが誘拐されたらしい、って話は知ってるな?」

「マリアはんから聞いたわ。それでウチに何か用がある、って言うから来たんやけど…。あ、そうや」

何かを思い出したかのように紅蘭が紙を渡す。

「大神はんがマリアはんに言っただけという宮城周辺の地図、ついでに持って来たで」

「悪いな」

「そう言うとお大神は机の上に地図を広げた。」

「紅蘭もそれを覗く。」

「大神はそれを暫くじっと眺めていたが、」

「…紅蘭、さっき紅蘭もドンを聞いただろ?」

「それはウチも聞いたけど…、急にどうしたんや?」

「いや、あれって確か12時丁度に宮城で空砲を撃つんだよな」

「それがどうしたんや?」

「…ここが宮城だ」

「そう言うとお大神は地図の中の「宮城」と書かれた部分を指差す。」

「…そして、ここが帝劇だ」

「そう言うとお大神は宮城から右斜め下に指を滑らせ、「大帝國劇場」と書かれた地点を指差した。」

「…それがどうかしたんか?」

「…紅蘭だったら音は1秒間にどれくらいの速度で伝わるか、それくらいは知っているよな?」

「何を言い出すのか思うたら…、1秒間に340米メートルやないか」

「そうだな。となると12時丁度に宮城でドンを撃つたとしてもこ

の帝劇にその音が聞こえてくる、と言うのも少し時間がかかる、と言うことだな。この地図で見ると宮城と帝劇は大体2<sup>キロメートル</sup>軒離れているから、大体6〜7秒遅れて聞こえてくるんだ」

「…どうも大神はんの話が見えてこんなあ…。そのドンと椿はんの誘拐が何か関係があるんか？」

「…実は、椿ちゃんを誘拐したと思われる犯人から身代金を要求する電話がかかってきたんだが、その時にこっちで聞こえたドンの音より少し送れて電話の向こうからもドンの音が聞こえてきたんだ」

「それは確かなんか？」

「ああ。確かに聞こえた。となると、もしかたらこれで椿ちゃんの居場所がわかるかもしれないな」

「…大神はん。確かに大神はんの目の付け所はええと思うで。でもまだそれだけじゃなんとも言えへんで。音いうのは四方八方に広がっていくもんやからな」

「…それはわかってるよ。もう少し手がかりが欲しいところなんだけれど」

その後、警察が帝劇にやってきてその対応に追われることとなり、結局その日は誘拐された椿は犯人と共に何処かにいるらしいこと、翌日昼頃にもう一度犯人から電話がかかってくること、などを話して翌日の電話を待つことになった。

\*

その翌日、10時を過ぎた頃だった。

帝劇に来た刑事たちと今後の対応を反していた大神たちの下へ、

「…失礼します」

と事務局に何人かの男が入ってきた。

「…どなたでしょうか？」

あやめが聞くと。

「あ、警察の者です」

よく見ると確かに男の中の一人が警察官の制服を着ていた。

「警察の？ 何か新しい情報でも入ったのでしょうか？」

「…そういうことになるかもしれませんが…。こちらの方が皆さんにお会いしたいと…」

と、一人の女性が事務局に入ってきた。

「…どのようなご用件でしょうか？」

「…いえ、この方のご主人が、もしかしたら今回の誘拐事件の犯人ではないか、と言っんですよ」

「何ですって？」

するとその女性は、

「はい。警察の方にも話したんですけれど、どうも皆さんの話した特徴から言っって主人ではないか、と。しかもこちらの売り子さんの誘拐までするなんて…」

「…なにか思い当たる節でもあるんですか？」

「…ええ。主人は小さいながらも町工場を経営しているんですが、最近経営が行き詰っってあちらこちらからお金を借りていて、いつの間にかその額も1万円を超えてしまっって…」

「1万円ですって？」

当時の1万円と言ったら相当な金額である。

「…勿論お金を返す当てなんてありません。それで主人はどうにもならなくなっって銀行を襲ったのではないか、と…」

「そのとばっちりを受けたのが椿だった、と言っわけですね」

「はい。私も主人も帝劇のお芝居を何回も見たことがありますし、売り子さんのことも知っっていますから、それを知っって主人は身代金の要求を考えたのではないかと」

「…」

「私も最初に話を聞いたときには信じられませんでした。でも、特徴を聞くと確かに主人とよく似ているんです。しかもこちらの肩にまで迷惑がかかるような事をするとは…。お願いします。何とか主人をこれ以上罪を重ねさせないで欲しいんです」

それを聞いたあやめは、

「…お話はよくわかりました。では奥さんは一旦家へ戻っていただけませんか？」

「しかし…」

「お気持ちはよくわかります。ですが、この先のことは私達や警察の仕事なんです。大丈夫です、これ以上ご主人に罪を重ねさせるようなことはさせません」

「…皆さんがそこまでおっしゃるのなら…」

「かすみ、この人を送ってあげて」

「はい」

あやめの言葉にかすみは頷くとその女性と共に帝劇を出て行った。

\*

時計がそろそろ12時になるうとしていたときだった。

帝劇の事務室に置かれてある蒸気電話の呼び鈴が音を立てた。

一人の掲示が手を伸ばそうとすると、

「…オレが出ます」

そういうと大神は受話器を取った。

「…もしもし」

「…あんだ、昨日の軍人さんか？」

「そうだが」

そういうと大神はなぜか左手に嵌めてある腕時計を見る。

「…身代金は用意できたのか？」

「…確か5万円だったな。心配するな。ちゃんと用意はしてある」

本当は用意も何もしていないんだが、こういったことにも駆け引きが必要と思っただのか、大神はそう言った。

「…いいか、一度しか言わないからよく聞け。身代金の入った鞆を有楽町駅に持って行け。そしてだな…」

そのとき、丁度12時を回ったか、昨日と同じようにドンの号砲が聞こえてきた。

大神は腕時計をじっと見ている。

程なく電話の向こうからも同じようなドンの音が聞こえてきた。  
「…それで、身代金をどうすればいいんだ？」  
何事もなかったかのように大神が電話で聞く。

そのときだった。

電話の向こうから蒸気鉄道の機関車が汽笛を鳴らしながら走り去っていく音が聞こえてきた。

「…？」

大神の顔つきが変わった。

「お、おい、聞いているのか？」

「…心配するな。ちゃんと聞いている。それで、身代金を有楽町駅に持って行ってどうするんだ？」

「…有楽町駅の改札のそばに置いて立ち去るんだ。もし約束を破ったらわかっているだろうな？」

「…わかっている」

そして電話は切れた。

大神も受話器を置くと地図を目の前にしてまた考え始めた。

「…それにしても、大神はん、大丈夫やるか？」

紅蘭がマリアに聞いた。

「大丈夫、って？」

「だって大神はん、電話で『身代金は用意した』なんて言うところけど、本当は一銭も用意したらんやで。一体大神はんどういつつもりなんや。下手したら椿はん、殺されてまうで…」

「まあ、隊長にも隊長の考えがあるんでしょうけど…」

「せやけど大神はん、どうやって椿はんを助けよう思ってるのやろ…」

そんな二人の会話も耳に入らないかのように、

「…大体2秒か…」

大神が呟いた。

「…2秒、ってどういうことですか、隊長？」

マリアが大神に聞いた。

「…昨日から気になっていたんだけど、犯人から電話がかかってきた時に丁度ドンの音が聞こえたんだ。そしてそれからすぐに電話の向こうからもドンの音が聞こえてきたんだ」

「…それが何か？」

「つまり犯人はドンの音が聞こえる範囲内にいるんじゃないか、もしかしたら椿ちゃんもそこにいるんじゃないか、と思ってね」

「どうしてそんなことが言えるんですか？」

「…ここでドンが鳴ってから電話の向こうでドンの音が聞こえるのに大体2秒かかっているんだ。ドンをならす宮城からこの帝劇まで大体2軒ある。と言うことは音は1秒間に340米進むから宮城で音を鳴らしてからここにその音が到達するまで大体6〜7秒かかる、と言うことだ」

「…それで？」

「今調べてみたんだが、ここでドンが鳴った2秒後に電話の向こうからドンの音が聞こえてきた。と言うことは椿ちゃんのいるところは宮城から2600〜700米はなれた場所にいるんじゃないか、ってね。」

「でも隊長、もし隊長の言うとおりだとしても、宮城からそんなに離れている地域となると範囲が広すぎて、逆にわからなくなるのでは？」

「うん…。オレもそう思ったんだが、どうやらもうひとつの手がかりになりそうなのがあるんだ」

「もうひとつの手がかり？」

「ああ。ドンが鳴った後に蒸気鉄道が通過する音が聞こえたんだ。と鳴ると犯人が電話をかけてきたのは線路が近くにある何処か…。もしかしたらその近くに椿ちゃんがいるかもしれないんだ」

「どうして、そう言い切れるんですか？」

「…マリア、もし君が誘拐犯で、ある場所に人質を監禁していて、

外で脅迫電話をかけるとしたら人質が逃げないように見張れる場所の電話を選ぶだろう？ それと同じだよ」

「とは言え、隊長の言う条件に合致する場所と言つのも結構あるはずですよ」

「そうなんだよな…。とにかく今は椿ちゃんがどこにいるかを見極めないよ」

そして大神は再び地図の上に目を落とす。

「…待てよ」

不意に大神はあることに気が付いた。

「…となると…」

大神の頭にひらめきが走った。

「…わかった！」

「何がわかったんですか？」

「椿ちゃんの居場所がわかったんだ！」

「本当ですか？」

「ああ、オレの考えだと椿ちゃんはあるそこにいるんだ！」

「本当ですか？」

「ああ。今からオレはそこに行く！」

「…でも、もし椿がそこにいなかったら…」

「とにかく、今はオレの言うことを信じてくれ！」

そう言つと大神は事務局を出ようとする。と、

「…隊長、私も行きます！」

マリアが言う。

「よし、わかった。マリア、行くぞ！」

「はいっ！」

と紅蘭が、

「ほな、ウチは何か連絡があるかもしれんからここにおるわ」

「頼むぞ、紅蘭！」

そして二人は帝劇を出て行った。

\*

新橋。

大神とマリア、そして何人かの警察官がその場にいた。

「…本当に、ここにいるんですか？」

マリアが大神に聞いた。

「ああ。オレの考えに間違いがなければ十中八九、椿ちゃんと犯人はここにいます」

そして大神たちは辺りを見回す。…と、

「隊長！」

マリアが大神を呼んだ。

「なんだ？」

「あれを見てください」

とマリアは線路沿いに立っているあるアパートメントを指差した。

「…あの部屋、何かおかしくありませんか？」

マリアが指差した部屋を見ると昼間だと言うのにカーテンがかかっていたのだった。

「…確かに昼間だと言うのに変だな…」

「…行ってみましょうか？」

大神のそばにいた警官が言うと、大神はそれに頷いた。

そして大神たちは慎重にその部屋に近づいた。

「…ここだな」

マリアが指差した部屋の前に立つ大神たち。

と、マリアが懐からエンフィールドを取り出した。それを見た大神は、

「…マリア、犯人を刺激したりしたら…」

「…これはあくまでも最後の手段です。私も出来る限り使いたくありませんが…」

と、傍にいた刑事が、

「…行きますよ！」

刑事の声に頷く大神たち。

そして刑事が思い切りドアを開け、警官達がなだれ込む。

「…大神さん！」

大神が考えたいたとおり、そこには一人の男が椿と共にいた。見ると椿が後ろ手に縛られた格好でいた。

いきなり飛び込んだできた警官達に男が驚いた表情を見せる。

程なく男が取り押さえる。その傍らで、

「椿ちゃん！」

「椿！」

大神とマリアが椿の傍らに近づき、マリアは椿を縛っていた縄を解き始めた。

「椿ちゃん、怪我はないかい？」

「え、ええ」

そしてようやく手が自由となった椿が手首をさする。

見ると男は既に手錠をかけられ、その場にいた。

「でも、大神さん。どうしてここがわかったんですか？」

「ん？ それはね…」

と大神はドンの音のズレから椿が監禁されている場所を推測した事を話した。

「…でも、線路沿いなんていくらでもあるんじゃないですか？」

「なあに、あの男は帝都銀行銀座支店に強盗に入ったんだろ？ 普通強盗をするといったらいつまでも逃げ回っている訳にも行かないから近くに隠れ家を用意するものさ。そう考えれば、銀座に一番近い線路沿いの場所といたら新橋じゃないかと思っつき。このあたりを捜してみたら、ここが見つかった、と言うわけさ」

「…そうだったんですか…」

そうこうしているうちに男が連れて行かれようとしていた。

「…あの人も随分とかわいそうなんですよね」

椿が呟いた。

「…らしいな。話は聞いたよ。あの人の奥さんがわざわざ帝劇に来て話してくれたんだ」

「本当ですか？」

「でも、だからと言って銀行に強盗に入ったり、椿を誘拐していいと言っことにはならないわ」

「…それはマリアさんの言うとおりですけど…」

と、椿は連れて行かれそうにある男に。

「あの、ちよつといいですか？」

「…なんだい？」

男が椿に聞き返した。

「…その、あたし、あなたの事恨んでませんから」

「え？」

「…だって、仕方がなかったんですよ。こんなことしなければどうしようもなかったんですよ」

「…」

「でも、その、どういっていいかわからないけれど、きっとあなたならこれだけのことが出来たならもう怖いものがないと思うんですよ。ですから、その、ちゃんと罪を償ってお芝居を見に来てくださいね。あたし、あなただったらいつでも歓迎しますから」

「…ありがとうな、椿ちゃん」

そして男は警察の車に乗って連れて行かれた。

「…あの人、大丈夫なんでしょうか？」

椿が聞く。と、マリアが、

「さあ。ここから先は警察の仕事だからね。…でも場合によっては情状酌量の余地があるかもしれないわよ」

「…そうですね。今はそれを信じるしかないですね」

と、大神が、

「まあ、とにかく、今はなんでもないとをみんなに知らせなきゃな」

「はい！」

（終わり）

(後編) (後書き)

(作者より)この作品に対する感想等は「ともゆきのホームページ」  
のBBSの方をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8609b/>

---

高村椿誘拐事件

2010年10月8日14時10分発行